

初語の理論的規定の試み

伊藤 武彦

(和光大学人文学部)

I 初語研究の意義

精神発達の途上において、1歳台に生ずる質的転換期は重大な意味を持つ。この頃に獲得される、直立二足歩行、道具の社会的機能に則った使用、そして言語の使用の3つは乳児期から幼児期への移行にとって誰もが獲得しなければならない決定的に重要なものである。これら3つは、人類が他の動物と一線を画して文化的存在になる過程での決定的な系統発生的指標であるともいえよう。

この3つの指標は、直立歩行と道具使用に関しては、全身の粗大運動、手の微細運動という違いはあるにしても観察可能な、チェック可能な行動として把握することができる。しかし、言語獲得に関しては、あるチェック項目を設けて獲得の有無を見るというように単純に客観的なメルクマールを決めることがむずかしい。従来、言語発達研究では、言語使用の開始については初語の研究というテーマにおいて追求されてきた。しかし、最近の初期言語発達研究の動向を概観してみると、音声がいかに体制化(音韻的な習得)し記号化(語意味の習得)するかというような音声言語そのものよりも、前言語期における母子の相互作用、たとえば物のやりとり(Bruner, 1975)や伝達の身ぶり(Lock, 1978; Bates, 1979)に注目し、それら非言語的な対人行動や伝達行動を、言語獲得の前提 prerequisiteとして重視するという傾向が顕著である(cf. 日笠, 1983)。対人的相互作用あるいは伝達行動というより広い視点から言語行動をとらえようとするアプローチは、言語とその獲得を、音韻、意味、統語という側面ではなく、機能的な側面あるいは語用論的側面を中心に研究してきた(Ochs & Schieffelin, 1979)。言語の機能的側面とは、発話行為がどのような伝達的役割を担うかといった問題を扱い、語用論的側面では、発話とその発話

のおかれた環境との関係を問題にし、前言語的時期における大人と子どものやりとりが、言語の伝達機能の前提であるばかりでなく、格関係という言語の意味的構造の基礎にもなることが主張されてきた(Bruner, 1975)。また、言語発達の認知的前提というテーマは、言語発達の領域と他の領域との共通の構造、たとえば、Piagetの感覚運動的知能の段階(Piaget, 1936)や田中昌人(1980)の中核機制の質的転換期の理論の枠組に言語発達を位置づけるという方法論によって主にすすめられてきた(Ingram, 1978; 長島, 1977)。それらの研究からは認知発達の段階と言語発達との間に構造的にも時間的にも深い関連があることが見出されている。

これらの精神発達と言語発達との関係を明らかにし、いわゆる言語習得の前提条件の問題に接近するためにも0歳後半から2歳までの時期において「初語」と呼ばれてきているものの概念の整理が必要であると考えられる。音声による伝達行動の発達の理論化のためにこの課題が必要なことと言うまでもないであろう。

初語の問題の実践的意義

初語とは何かの問題を明らかにするにあたって、まず、実践的にこの問題がどうして重要なのかについて述べておきたい。保健所などに来所した子どもの言語発達を評価する場合の通常の方法は母親に対する面接によって、子どもがどのようなコトバを話すか等を聞くという、間接的な方法によっている。たとえば、東京都内N保健所においては、母親に、「どんなコトバを話しますか」と問うて、1歳6か月児で語数が5単語以下の場合、言語発達遅滞の可能性を考え、経過を追跡することにしていく。1歳6か月の時に単語が1語も出ていない場合は、言語発達遅滞の可能性はきわめて高い(Darley & Winitz, 1961)が、2語以上5語以下の子どもの場合には、3歳頃までに正常の言語発

達水準に追いつく、いわゆる特発性言語発達遅滞と鈴木(1979)によって呼ばれているような発達像を示す場合も多くある。言語発話だけでなく、言語理解の水準をも測定するとともに、子どもの対人関係(eg. 大人と視線が合うかどうか)や身ぶり等による伝達能力(eg. ゆびさし行動)という前節で述べた前言語的行動にも着目して総合的に発達を評価することが、言語獲得の予後を予測するために重要なのである。

- * 本論文では「母親」という語で養育者(caregiver)である大人すべてを代表させる。したがって、この語は養育者である保母、父親、祖母等も含む。

さて、初語というものは一見平明に定義されるようにみえて、容易でなく、過去の初語獲得時期に関する諸研究間でまちまちな操作的定義が出されていたり、あるいは全く定義されずに研究が遂行されていたりする*。このような状況は、実践的に好ましいことではないばかりでなく、理論的に語とは何か、あるいは言語とは何かという本質的な問題が未解決であることの反映であると考えられよう。妥当性を持った規定が、初語に求められているのである。初語の定義の妥当性——これが第一の方法論的問題である。心理学者が明確で明解な初語認定の基準を確立し、かつ心理学者間でそれが共有されなければならないであろう。

- * 初語獲得に関する先行研究は、村田(1977)(第11章)によって詳しい紹介がなされている。

第二の方法論的問題は、母親に対する面接という間接的な資料収集によることからくるデータの信頼性の問題である。研究の労力や効率の面から母親に対する面接法は広く採用されているし、保健所での健診活動では、各々のケース当たりの時間的配合を考えると、これ以外の方法で言語発話のデータを取ることは実際にはまず考えられない。また、この方法は、時間的・労力的に効率がよいというだけではない。母親こそが子どもの初語の最初の発見者であり、子どもの言語発達が実現されるマイクロ・システム* (Bronfenbrenner, 1979)における参加者であり、最も身近な観察者であり、子どもの言語にとって最良の解釈者であるという事実がある。第三者である研究者が、このマイクロ・システムの中に入り込むこと自体が困難な課題である。さらに現象学的観点からすれば、初語とは母子間の間主観性 intersubjectivity の上にまず成立する。いわゆる「客観性」を持った語の使用というものは、母子相互作用場面というマイクロ・システムを超えた様々な場面、すなわちメゾ・システム** 間にわたった語の社会的協約性を持った意味の使用ということが成立してい

なければならない。しかし、そのような語の使用を初語と定義するとすれば、その社会的協約性が成立する範囲を決定しなければならない(たとえば敬語は、身内以外の人間関係では必要不可欠であって、これの未獲得は、改まった場面において言語活動に齟齬をきたすという点から、真の言語習得が行われてはいないということになる)。社会的協約性には、後述するが(1)音韻面での社会的協約性の問題——たとえばイヌを「ワンワン」、トリを「チッチ」と呼ぶことを Ferguson (1976)のように前語 prewords として初語 first words と区別している立場もある——と(2)語の意味的側面での社会的協約性の問題——たとえば、子どもの語い意味が大人よりも広い過剰一般化 overextension や狭い過少一般化 underextension という現象として初期の語い意味が問題にされてきた——の2つがある。これら社会的協約性の問題は、まさに初語の定義の妥当性の問題でもあると言える。

- * マイクロ・システムとは「ある所与のセッティングにおいて、発達しつつある人間によって経験される諸活動のパターン、役割、対人関係」である。

- ** メゾ・システムとは「発達している人間が能動的に参加しているところの2つ以上のセッティングの相互関係からなる」システムである。たとえば、学童にとっては、家庭と学校と仲間集団との関係がメゾ・システムにあたる。

母親の報告による初語の識別は、したがって子から母への音声の伝達において母が意味する語だと受け取ったある音声単位と定義することも一つの立場であろう。つまり、母が「これは初語だ」と思った子どもの発声がすなわち初語なのだとする考え方である。このような立場は、Bronfenbrenner 流のマイクロ・システムにおける、生態学的妥当性を現象学的に解釈した立場であると考えられる。母親の了解可能性を基準にするという視点は重要であると筆者も考える。

しかし、ここで問題となるのは Vygotsky (1962) のいう、精神間機能から精神内機能への移行の問題である。あらゆる精神的機能は社会的・対人的関係や教育的働きかけの中で個人間においてまず成立し、次に個人内に、いわゆる「能力」として定着するというこの Vygotsky のテーゼは、初語の成立の問題に対しても妥当性を持つものであると考えられる。すなわち、母親と子どもの間でしか意味内容が伝達可能でない段階の初語は、いわば精神内機能に移行する前の精神間機能のみの語である。精神間機能としての初語は、音韻形式・語意味・伝達可能性の面において大人の語より不完全であり、母親の経験や解釈によって語としての

機能を果たしうる。

Ito (1981) は0歳児の伝達行動(身ぶり等)とPiagetの感覚運動的知能の段階とを関係づける上で、精神内機能としての乳児個人の伝達行動の様式は感覚運動的知能の段階と対応関係がみられる一方で、精神間機能としての母子の間での伝達行動の様式は、感覚運動的段階を一段階ずつ先行していることを仮説的に提起した。この仮説を初語の問題に適用してみると次のようになる。すなわち、精神内機能としての初語は感覚運動的知能の第六段階(1歳半～2歳)にあたるシンボリックな内容を持つが、それが母子の間で精神間機能として伝達行動内に出現するのは感覚運動的知能の第五段階(1歳頃～)の時期である。

従来の初語研究では、精神間的機能段階の初語と精神内的機能段階の初語との区別が不明瞭であったと思われる。本論文では、以下、精神内的機能を持つ初期の語を「初語」と規定し、その属性について(1)音韻論、(2)意味論、(3)語用論の3側面から理論的な考察をおこなうことを目的とする。したがって本論文で規定されるころの初語は従来の定義・基準よりも厳密である。精神間機能のみの初語を広義の初語の定義に含むならば、狭義の初語の定義を本論文はめざしているのである。

II 初語の定義

語 word は、ある一定の音韻的形式を持っていないとできない。また、ある一定の意味を表示するものでなければならない。また、Saussure (1916) のいうように、音韻的形式とそれが表示する意味との間には恣意的(直接的なつながりを持たない)でなければならない。さらに、大人—子どもの相互作用の場面で用いられた時、語は伝達的機能を持っていないとできない。そこで本章では初語の3つの側面、すなわち音声形式、意味、機能の各々とそれらの相互関係について吟味し、初語の基準の確立を試みたい。

(1) 初語の音韻的形式

0～1歳の時期の子どもの音声産出の発達について概観しよう。まず、生まれたばかりの新生児は「うぶ声」すなわち泣き声 crying を発する。出産後しばらくは泣き声のみであるが、生後1か月頃より、泣き声以外の発声が、機嫌のよい時等に行われる。これは子どもが構音を意図的に行うのではなく、呼吸に伴う偶然的な音であり「アー」「ウー」等の音に聞こえる。

ハトの鳴き声に似ていることから、このような発声は cooing と呼ばれている。生後6か月頃になると「マンマン」とか「バブバブ」のように複数の音節から成る喃語 babbling が発生する。喃語は通常、唇音(m, p, b) + 母音のくり返しであり、反復喃語とも呼ばれる。発声をくり返して楽しんでいるようであり、何か大人にメッセージを伝えるというような機能を持っているわけではない。1歳に近づくと、子どもは、「アッ、アッ」とか「オッ」とかの短い発声を大人に注意を向けるように、しばしば身ぶり gesture を伴って、発することが頻繁になる。ある場面においていつも決まった音声形式が用いられるので、Dore *et al* (1976) は、Phonetically Consistent Forms (PCF) と呼び、これを前言語的な喃語から語への移行期に現われる媒介的なものと位置づけ、PCFに以下の4つの特徴づけを行っている。すなわち、(1)喃語と違って)ポーズによって区切られており、(2)子どもの音のレパートリーにおける項目として繰り返し使用され、(3)特定のある同じ条件と部分的に関連しうるものであり、(4)その音声要素が喃語より安定しているが語よりも不安定であるという点で“原音素的”構造と記述されるような性格のものである、としている。このようなPCFは音声的に一定の形式を持つが、次節でも述べるように、その意味が対象の特性に基づいているのではなく、主体の状態や場面に基づくものであり、初語とは区別されるべきものである。

PCFのような移行的段階を経て、初語が現われてくると通常考えられている。しかし、Ferguson (1976) は、意味を伴う発声であっても大人の使う形式に基づいた語を初語 first words と呼び、大人の語の形式に則らないものを前語 preword として区別している。このような基準は音声面での初語の基準としては、最も厳格であると言えよう。この基準によれば「ワンワン」「ニャンニャン」「ブーブー(車)」「ニューニュー(牛乳)」「トット(魚)」等の幼児語は、すべて初語というカテゴリーに分類されなくなってしまう。この問題を音声形式の社会的協約性の観点から考察してみよう。母子間という2者関係にのみ成立しているが、他の大人が聞いても理解不可能な場合、それは母子相互作用の特定のセッティングでのマイクロ・システムにおいて協約性が成立していても、子どもにとって他のマイクロ・セッティングでは成立しないのであり、すなわち、メゾ・システムにおける社会的協約性が未成立であるということが出来る。しかし、先に紹介した幼児語は、いずれも大人が(たとえ子どもに慣れて

いなくとも) 聞いて了解できる音声形式である。それは大人同士で使う符号 code とは別の符号であるが、その文化あるいは言語に固有な符号なのである。「ワンワン」という符号は犬の鳴き声の擬声語 onomatopoeia であり、符号と意味との間に恣意的な関係が成立していないのではないかと、つまり犬の鳴き声は犬に対して、部分と全体の関係にあり、部分で全体を表わす標式 index (Piaget, 1936) にすぎないのであり、それを記号と呼ぶことはできないのではないかという反論がある。たしかにオノマトペの音声形式との類似性があるが、それは単に鳴き声等を子どもが模倣しているのではなくて、子どもの構音上の制約、すなわち同じ CV(C)(C...子音, V...母音) 音節の繰り返しが構音上容易なのであるという発達の制約のためであろう。また、このような、一見、鳴き声等の直接的模倣に聞こえる音声形式も実は、文化的性格を持っており、言語の違いによって形式が異なることが他国の乳幼児の言語獲得との比較により推測される。Braunwald (1978) は、11 か月児が犬という意味で Bow-wow と発声したのを観察した。このように日本語ではワンワン、英語では Bow-wow というように、文化の差による音声形式の差が存在する。これはそれぞれのマクロ・システムの中において形成された音声形式であり、この点から、前語 prewords と言わず初語 first words と呼んでいいと考えるのである。すなわち、音声レベルでの初語の基準としては、①音声形式が安定しており、同じ対象あるいは意味に対して、同一の音声形式の使用が認められること、と、②その音声形式がメゾ・システムやマクロ・システムにおいても社会的協約性を持つ、すなわち母親以外の他者にとっても理解可能であること、の 2 つとなろう。

* この研究では音声の記述が、表音文字によらず、英字綴りによっており、記述が精密であるとは言えないという問題がある。ここには聞き手の音韻的枠組の文化差の問題があり、Bow-wow とワンワンの音声形式の差を証明するためには、ソナグラフ等の音響音声学的方法による検証が、厳密には必要である。

(2) 初語の意味論的構造

ルリヤ(1979)は、語の意味論的構造を問題にするにあたって以下の 3 つの語の機能を分析している。まず第一に、語の基本的機能であるところの、表示的役割を持つ対象指示 reference 機能(または語の代表・代理機能)が挙げられる。語の意味とは、まず、その語が何を指し示すかという「外延的」な意義である。そ

して、各々の語に含まれた様々な意義の中から、ある意義を抽出してその語を使用するというように、語には内包的な意義をも含む。第二に、「カテゴリー的」あるいは「概念的」意義がある。すなわち、語は単に事物を代理するだけでなく、事物を分析し、その事物を複雑な諸結合や諸関係の中に導き入れる。このような、捨象、抽象、一般化、分析の機能を語は担っている。対象的機能は、いわば具体的表象に対し、カテゴリー的意義は、いわば一般的表象に対応するものである。第三番目の語の機能は、語的機能である。これは統語における語の文法的意味関係に関する機能であり、ある語が統語の中でどのような位置を占めるかの問題に係わっている。

初語の識別の問題に関連して語の意味を扱うときに、まず問題となるのは、第一の機能、すなわち語の対象指示的な機能であろう。初語と呼ばれるためには、ある対象を指し示す音声形式が一定であるばかりではなく、その音声形式によって指し示す諸機能が一定でなければならない。

さて、初語の対象指示的機能を明らかにするために、前章で紹介した Phonetically Consistent Forms の機能を記述・分類したものが参考になる。Dore *et al.* は PCF の機能として以下の 4 つを挙げている。

(a) 感情表現 affect expression: 喜び、満足、怒り、抗議等の特定の感情と結びついている。たとえば、快の状態の時 [gægi], [gagi] と発声する。

(b) 道具的表現 instrumental expression: 子どもが物を欲しがったり、大人に特定の行動を求めるような時に発せられる。たとえば、母のところへ行きカップを指さし reaching して [m:::] と発声する。

(c) 指示表現 indicating expressions: 周りの何かに子どもが注意したり、それを他者に示したりする時におこり、凝視と指さしを伴う。たとえば窓の外を見て指さし、[bæ] とか [dæ] とか言う。

(d) 群化表現 grouping expressions: 主体の状態と対象の特性(あるいは外界のある側面)との間の相互作用を反映しているが、主要要因は感情のようである。第一のタイプでは、子どもの感情状態によって、同じグループの対象に異なった発話が行われる。たとえばオモチャに対して、やや欲求不満の時には [ubiba] と言い、満足している時には、[adæ] と言う。第二のタイプでは、子どもにとって同じ感情的意味を持つ、異なった 2 つの物に対して 1 つの形式を用いる。たとえば、哺乳ビンと気に入った人形に対し [babi] と発声する。

PCFの指示機能と群化機能は、語の対象指示 reference 機能の萌芽を含んでいると言ってよい。Dore *et al.* は、語の対象指示機能の条件として、次の2点を示している。

(1) ある場の中から何らかのモノあるいはコトを他者に指し示すという指示 indicate をしなければならない。

(2) 対象を弁別するという機能を持ち、ある所与のグループの一員に対して同じ音声形式が用いられなければならないが、異なったグループに対しては異なった音声形式を使用しなければならない。

指示機能を持つPCFは、(1)条件を満たしても(2)条件に欠けている。また、群化機能をもつPCFは(2)条件をも満たしているようであるが、弁別の基準が主体の状態に色濃く影響を受け、対象の属性に基づいていない点で、(2)の条件は満たしていないのである。

PCFは初語の前段階であり、前者から後者への移行は、音声形式の持つ意味が情動や欲求から独立していくことであるとともに、対象の属性等の外界の特徴に基づいたものになることである。このような外界のある特徴(モノやコトの属性)に対応した特定の音声形式は、はじめは母によって与えられ、母-子間で共有され(子どもによる意味の理解)、最後に子どもによって使用される(初語の産出)という道順をたどる。初語の基準として、Dore *et al.* の提出した2条件が妥当であると考えられる。

なお、この2条件による初語の定義の問題点を挙げるならば、それは、no, yes, please などの意味を表わす、個人-社会語 personal-social words (Nelson, 1973) をどう扱うかということであろう。これは残された課題である。

(3) 初語の伝達的機能

前節の初語の2条件によると、他者に「指し示す」ということが初語に不可欠であるということになる。この条件(1)の中に、初語が伝達的な文脈の中で使用されなければならないということが示されているのである。このような音声の伝達的使用は、普通児の場合、ことさら問題になることはないのであるが、対人的能力に問題を持つ障害児(eg. 自閉症児)の場合には、きわめて重要な指標となっている。

初語の伝達的使用ということで、乳児期から幼児期への質的転換期を乗り越えることとの関連で問題になることは、「ワンワンはどれ(あるいはどこ)?」というように語の外延の意味に基づいて指示対象を子ども

たちに指さし等で示させるための問いに対して、正しく反応できるかということである。この反応は「応答の指さし」(または「可逆の指さし」)と呼ばれ1歳半健診で言語発達を診断する上で重要な基準となっている。語いの理解数は発話数に先行することが知られている(Benedict, 1979)し、言語の重要な条件として、Interchangeability すなわち同一個体が発信と受信の両方を行うこと(Hockett, 1958)も指摘されている。このような語の可逆的(田中, 1980)な使用についても、初語の判断の重要な基準であるということができであろう。

ただし、特定の検査場面で、このような応答の指さし反応が生じなかったといって、それが語の可逆的な伝達的使用の未獲得ということを直ちに意味するわけではない。母-子間のマイクロ・システム内での可逆的使用の成立を初語の機能的な面での最低条件とすべきである。

III ま と め

初語の識別基準の設定を理論的に考察し、音韻面、意味面、機能面の3つの側面から規定することを提案した。音韻面では、音声的に安定した形式を使用し、かつその音声形式がマイクロ・システムより上位のレベルで社会的協約性を持つことの2点を基準とした。意味面では、語の対象指示的使用の有無について(1)何らかのモノあるいはコトを他者に指し示すものであり、(2)対象を弁別する機能を内在させているという2点が基準になる。機能面では、語の伝達的使用が可逆的であればいけないという点を基準にした。

本論文は未完成で不十分な「研究ノート」をそのまま提出したようなものであり今後の展開が必要である。批判・コメント・提案を歓迎する。なお、本研究は、東北大学大学院に提出した「課題研究論文」(1983年12月)に加筆・訂正を加えたものである。(1985年6月18日)。

参 考 文 献

- Bates, E. 1979 *The emergence of symbols: cognition and communication in infancy*. N. Y.; Academic Press.
 Benedict, H. 1979 Early lexical development: comprehension and production. *Journal of Child Language*, 6, pp. 183-200.
 Braunwald 1978 Context, word and meaning: toward a communicational analysis of lexical acquisition. In A. Lock (ed.) *Action, gesture and symbol*,

- Academic Press, 1978, pp. 485-527.
- Bronfenbrenner, U. 1979 *The ecology of human development*. Harvard University Press.
- Bruner, J. 1975 The ontogenesis of speech acts. *Journal of Child Language*, 2, pp. 1-20.
- Darley, F. L. & Winitz, H. 1961 Age of first word: review of research. *JSHD.*, 26, pp. 272-290.
- Dore, J., Franklin, M. B., Miller, R. T. and Ramer, A. L. H. 1976 Transitional phenomena in early language acquisition. *Journal of Child Language*, 3, pp. 13-28.
- Ferguson 1976 Learning to pronounce: the earliest stages of phonological development. In F. Minifie and L. L. Lloyd (eds.) *Communicative and Cognitive Abilities—early behavioral assessment* Baltimore: University Park Press, 1977 [Fletcher & Garman 1979: pp. 3-13].
- Fletcher, P. and Garman, M. (eds.) 1979 *Language acquisition: studies in first language development*. Cambridge University Press.
- 日笠摩子 1983 話しことばの獲得についての研究動向 障害者問題研究, 34, pp. 86-93.
- Hockett, C. F. 1958 *A course in modern linguistics*. New York: Macmillan.
- Ingram 1978 Sensori-motor intelligence and language development In A. Lock (ed.) *Action, gesture and symbol*. Academic Press.
- Ito, T. 1981 Social and cognitive development in the first year of life. (Unpublished)
- Lock, A. (ed.) 1978 *Action, Gesture and Symbol: the emergence of language*. Academic Press.
- Luria, A. R. 1979 天野清訳(1982) 言語と意識 金子書房.
- 村田孝次 1977 言語発達の心理学 培風館.
- 長島瑞穂 1977 ことばとつたえあい ミネルヴァ書房.
- Nelson, K. 1973 *Structure and Strategy in Learning to Talk*. SRCD Monographs 38 (1-2).
- Ochs, E. and Schieffelin, B. B. (eds.) 1990 *Developmental Pragmatics*. Academic Press.
- Piaget, J. 1936 *La naissance de l'intelligence chez l'enfant*. 谷村覚・浜田寿美男(訳) 知能の誕生 ミネルヴァ書房。(1978)
- Saussure, F. de. 1916 *Cours de linguistique general*. Paris: Payot.
- 鈴木昌樹 1979 微細脳障害 川島書店. pp. 143-175.
- 田中昌人 1980 人間発達の科学 青木書店.
- Vygotsky 1962 柴田義松訳 思考と言語(上・下) 明治図書.